

# 古代の隠岐は黒曜石の宝庫



黒曜石を産出する久見（隠岐郡五箇村）の海岸



現代の黒曜石露頭（五箇村久見）  
黒っぽく見えるのが原石。黒曜石は火山が噴火した際に、溶岩中のガラス成分が急激に冷えて結晶化したものである。

## 石器時代、だれもが欲しかった黒い石

黒曜石は、現在ではほとんど見ることがも聞くこともなくなり、大昔にはとても身近に使われていた石でした。

今から一万年以上前の旧石器時代から三三〇〇年前の縄文時代までは、物を切ったり削ったりする道具はほとんどが石で作られていました（鉄器が普及する弥生時代になると、石器はしだいに使われなくなりました）。とくに割れ口の切れ味が鋭く、刃物として重宝する黒曜石はよく使われていました。

古代人にとって貴重な石である黒曜石ですから、その産地が隠岐だということは、当時はほとんどの人が知っていたと思われれます。ここでは黒曜石を求めて、隠岐を訪ねてみます。

## 火山によってできた島「隠岐」



上空から見る隠岐の山々

隠岐が火山によってできた島であることは、意外に知られていないようです。しかし、島前にある国賀海岸や赤壁などを目にするといつい最近まで火山が活動していたかのような錯覚を感じます。火山活動によってできた岩石の一つが黒曜石ですが、いつ、誰が隠岐でこの石を発見したのかははっきりしていません。

日本海に浮かぶ隠岐は、本土から約五〇キロも離れています。ここがらわなわな本土まで通んでいたわけですが、当時の人たちにとって、いかに黒曜石が大切だったかが想像できます。黒曜石の採れる場所として、五箇村の久見、西郷町の津井（男池）と加茂の三カ所が確認されていますが、実際に利用されたのは、久見産のものがほとんどです。

## 今でも原石がある久見の採掘現場

黒曜石は、現在では隠岐のみやげ物として、アクセサリや置物に加工され売られています。石は島後の北端に近い五箇村の久見海岸で採れます。ここへ行くと原石の状態の黒曜石を見ることが出来ます。この黒曜石の露頭（岩石や鉱脈の一部が地表に現れている所）は国立公園の中にある海拔約二二メートルの崖にあり、一歩間違えば海へ落ちてしまつ危険な場所です。

現在採掘を行っているのは地元在住の八幡昭三さんとその家族で、年間約一トンを手掘りで採っているそうです。原石は崖面にブロック状に見られ、何カ所に集中する地点がありますが、すべて手作業のため、探し出すにもたいへんな手間がかかるという話です。



現代の黒曜石  
みやげ物として売られている黒曜石のほとんどは美しく磨かれており、なかには「勾玉」の形にまで加工されたものもある。しかし古代にはこうした「磨かれた黒曜石」は作られておらず、実用の道具しか作っていなかった。美しいが黒い色をした黒曜石は、アクセサリとしては敬遠されたのだろうか？

## 黒曜石の原石

黒いガラスのようなイメージのある黒曜石だが、山から採掘されたときは、表面が風化して、ざらざらした灰色や灰黒色をしているものが多い。しかしこれを割ると、中から黒く輝く美しい表面が現れる。まさに割ることによって初めて生命が与えられる石といえる。



大原遺跡（安来市佐久保町）出土の黒曜石の原石 重さ4380g  
写真は本州で見つかった原石で未加工のまま持ち帰っていたものである。

石を求めて何千里  
黒曜石哀愁物語

③ ドッカーン！

④ もうすこしだ

⑤ ついにやったー

① 生きて帰ってこいよ～

② さ、さきは長い